

# 1822年、ジョン・クラウファードが見た 嘉定城の一大湊カンザー

鈴木伸二

スコットランドの医師で植民地行政官でもあったジョン・クラウファード (John Crawford) は 1821年から 1822年にかけて、インド総督のフランシス・ロードン＝ヘイスティングズへの要請を受け、使節団の団長としてシャムとコーチシナを訪問した。この旅程をまとめたものが *“Journal of an Embassy from the Governor-general of India to the Courts of Siam and Cochin China”*<sup>1</sup> である。この本は日誌の形式で書かれており、彼がいつどこにいたのかが明確にわかる。クラウファードはシャムを訪問した後、1822年4月5日にコーチシナへと向かった。その後、東シナ海のコンダオ島を経由して8月24日にプンタオ岬に到着し、8月28日まで『嘉定城通志』で「一大湊」と謳われたカンザーに滞在した。本論はこの間の日誌を彼が残した文章そのままに紹介しようとするものである。

筆者は本誌『民俗文化』36号に「嘉定城通志を通してみた阮朝初期のマングローブ湿地と風俗」を寄稿している。この論考は現在のホーチミン市カンザー県に相当する地域の過去を 1820年に編纂された『嘉定城通志』から読み解いたものである。『嘉定城通志』は阮朝の元勳であり、協辨大学士でもあった鄭懷徳によって編纂され、二代皇帝の明命帝に献上された。ベトナム史においても同書は 19世紀初頭の南部ベトナムを知る一級の史料だと考えられている。

一方、クラウファードの著書は日誌形式で書かれており、当時のカンザーを包括的に理解するには役立たない。だが、それだからこそ、彼がカンザーで見聞き

したことがリアルに書き込まれている。そして、このリアルな描写は『嘉定城通志』にはみられないものである。『嘉定城通志』のカンザーと、クラウファードが見たカンザーを比較することで、当時のカンザーをより深く理解できるだろう。

本論の目的はあくまでクラウファードが見たリアルなカンザーを示すことにある。そのため、筆者が翻訳した文章とその注釈で構成されている。原文は Appendix に一括して掲載する。なお、クラウファードの日誌は 8月24日、25日、26日、28日の4日分で、27日のものはない。また、この日誌ではカンザーを “Kandyu”、プンタオを “Cape St. James's” もしくは “Pungtao”、サイゴンを “Saigun” と表記している。Appendix の原文は、これをそのまま踏襲している。

## 1. 8月24日

昨日の朝早く、約 25 マイル (mile) 先に小さな 3 つの島のような姿でセント・ジェームズの岬が見えた。だが、風が止み、潮流も私たちの進行方向と逆向きになったので、午後まで沖で停泊することになった。その後、再び帆をあげ、今朝早くにココナッツ湾 (bay of Cocoa-nuts) に停泊した。標高が 300 ~ 400 フィート (feet high) のセント・ジェームズ岬はサイゴン川の東側の入り口になる。ここは 200 マイルにわたる低い海岸線に沿って航海してきた後に現れるので、河川の入りを示す優れた目印になる。岸から 1 マイルほど距離をとって船を停泊させ、満潮を待つ間に岬に上陸した。セント・ジェームズ岬の丘陵を形成する主要な岩は硬くて丈夫な花崗岩からなり、とりおり閃緑岩が混じっている。山は全く耕作されておらず、竹が多くを占めるまばらな森林に覆われている。森の中で野生の鳥の鳴き声と、鷹や鳩を見かけたが四足動物はいなかった。

午後に満潮になったため、カンザーに向けて出航

1 本論で使用したクラウファードの *Journal of an Embassy from the Governor-general of India to the Courts of Siam and Cochin China* は、Google Books がウェブ上で提供しているものとなる。同書は 1830年にロンドンの Henry Colburn and Richard Dentley を版元として出版された第 2 版となる。  
[https://books.google.co.jp/books/about/Journal\\_of\\_an\\_Embassy\\_from\\_the\\_Governor.html?id=sAUPAAAAYAAJ&redir\\_esc=y](https://books.google.co.jp/books/about/Journal_of_an_Embassy_from_the_Governor.html?id=sAUPAAAAYAAJ&redir_esc=y)

し、夕暮れ前には停泊地に到着した。セント・ジェームズ岬の丘陵の終わり、湾に突き出した先端にあるブントオ村を通過した時、この地のチーフ（Chief）が大勢の従者を連れて乗船してきた。チーフは60歳ほどの小柄で快活な老人だった。彼と彼の従者は、メナム川の河口で出会ったシャム人とは真逆だったので、強く印象に残った。コーチシナ人はきちんとした身なりをしており、陰気で動作が鈍いシャム人とは対照的に、活発で礼儀正しかった。この役人はサイゴンの総督（Governor）宛に手紙を書き、カンザーのチーフ（彼の上司）を通じてこれを送るように要請した。そこで、私たちは彼の閣下（His Excellency）に宛てて英語の手紙を書き、フランス語の翻訳文を準備した。当時、サイゴンには数名のフランス人がいると聞いていたので、原文を理解できない場合を考えた対応を行うことにした。そして、この手紙をカンザーのマンダリン（Mandarin）に送ったところ、彼から私たちの手紙と共に、中国語で表記した使節団と乗組員の名簿、積載している銃器や武器、弾薬のリストをサイゴンの総督に送る必要があるとの返信があった。私たちはこの要請に応えた。

カンザーは河川の右岸、もしくは西岸にあり、河口と見なすことができる。セント・ジェームズ岬からここまでは9海里（nautical mile）ほどで、河川の一部というよりは湾だといえる。セント・ジェームズ岬が丘陵だったのに対して、その西側は平坦な岸から広がる広大な泥地で、船の航路として使用できるのは2.5海里ほどしかない。泥地から東側の岸まで広がる大きな湾の幅は少なくとも4.5マイルはある。航路の中央は6から9ファザム（fathom）の深さがあり、河川の航路も10ファザムを下回るとはほとんどない。そのため、この素晴らしい河川はどんな大きな船でも航行が可能で、ほとんど水先案内人を必要としない。私たちは方位測定と測深、海図を頼りに馴染みの港にでも入港するように、やみ夜の中、船を大胆に進めた。実際の河口の幅は1.5マイルほどだった。

私たちはどの方向から風が吹いても安全なカンザーのすぐ後ろに停泊した。東にはセント・ジェームズ岬の丘があり、北の方角、25マイルほど先には高い山脈が見えた。それ以外は樹高の低い木々に覆われた森と、あちらこちらに点在する漁村しか見えなかった。広大な沖積地を流れる大きな川から水が流れ出ている

にも関わらず澄んでいるのは、ガンジス川やメナム川の濁った水と鮮やかな対照をなしている。

まず、最初にクラウファードの日誌から地理に関する情報を整理しておこう。クラウファードたちがブントウ岬の山をその視界に捉えたのは8月23日の早朝だったが、彼らは潮待ちのためブントウ岬から25マイル離れた場所で一旦停泊している。1マイルは1609メートルなので、ブントウ岬から40キロメートルほど離れた外洋で潮待ちをしていた。午後になってココナツ湾に移動している。この湾がどこかはわからないが、サイゴン川の東の入り口とあるのでブントウ岬のいずれかの場所だろう。クラウファードはブントウ岬の山を300フィートから400フィートを見積もっている。メートルに置き換えると92メートルから122メートルほどの山となる。ブントウ岬の先端には大山（標高245メートル）と小山（標高170メートル）の二つの山があるが、標高から類推するに小山の近くに停泊したのだと思われる。また、クラウファードは小山が花崗岩からなる山だとしている。『嘉定城通志』においてもブントウ岬の「獺磯山」は「石山」だと明記されている（巻二山川志辺和鎮）。

クラウファードはカンザーが航路として極めて優れていることを「馴染みの港にでも入港するように」という言葉で賞賛している。『嘉定城通志』においても「港は水深が深く、広いうえ、穏やかであり、日々商船が出入りしており、嘉定城と海をつなげる一大港である（港内深廣平穩、日有商船出入、爲嘉定城、海會之一大湊集無與爲比）」（巻二山川志藩安鎮）、「港内は広く水深も深い。四季八風は穏やかで、砂州や岩礁もなく、大きな波や風もないため、諸国第一の港だと讃えられている（港心深廣、四時八風、俱保穩濟、無暗沙伏礁、怒濤凶風之患、最爲諸國第一美稱之海港）」（巻三疆域志疆域）とある。

クラウファードの記録に従うと、ブントウ岬からカンザーまでは9海里、約17キロメートルとなる。実際のブントウ岬の先端からカンザーのカンタイン町までは9キロメートルほどなので、クラウファードが停泊した場所はガンライ湾の内側でロンタウ川の河口近くだったと思われる。彼はここで航路として使用できるのは2.5海里（約5キロメートル）だと見積もり、河口の幅を4.5マイル（約7キロメートル）だとし

た。そして、河口域の水深を6～9ファザム、河川の水深を10ファザムだとした。1ファザムは1.8メートルなので、河口の水深を11～16メートル、河川の水深を18メートルと見積もっていたことになる。筆者がカンザー県の水産局でみた海図では〔鈴木2007〕、ロンタウ川河口の水深は4～9メートルだったので、これよりは川底を深く見積もっていたことになる。

次に、外国船が来航した際のベトナム側の対応をみてみよう。午後、彼らは対岸のカンザーに移動を始めるが、岬の先端でブンタウ村のチーフと会い、サイゴン総督宛の手紙をカンザーのチーフを介してサイゴンに送るよう要請されている。クラウファードはカンザーのチーフがブンタウ村のチーフの上司だとしている。これを受けて、彼らはサイゴン総督宛の英語の手紙と、これをフランス語に翻訳したものを準備した。なお、彼がサイゴン総督や「彼の閣下」と述べている人物は、当時、嘉定城総鎮だった黎文悦（Lê Văn Duyệt）である。この黎文悦宛の手紙にわざわざフランス語の訳文を添えた理由としてクラウファードは「サイゴンには数名のフランス人がいると聞いていたため」だとしている。阮朝とフランスの関係は初代皇帝となる阮福暎の軍事顧問としてフランス人が雇われていたことに起因する。阮福暎は中部ベトナムに拠点を置いていた広南阮氏の王子であった。1771年に西山の乱が勃発し、1777年に暎を除く王族はことごとく虐殺されたため彼は逃亡生活を余儀なくされた。これを支援したのがハーティエンで宣教活動に従事していたピエール・ピニョー・ドウ・ベヌ（Pierre Pigneau de Behaine）だった。彼は暎の息子である阮福景を伴いフランスに帰国し、ルイ16世と謁見して阮福暎への援助を要請した。その結果、1787年11月にフランスとの同盟が成立している。その後、彼はインドのポンティシェリーを経由してコーチシナに戻ったが、ポンティシェリーの総督がフランス軍の派兵を拒否したため、自ら武器や弾薬、志願兵を集めている〔多賀2022〕。この時に志願したフランス人は阮福暎の軍事顧問として雇用された。ピエール・ピニョー・ドウ・ベヌは1789年に赤痢で死亡するが、シェノー（Jean-Baptiste Chaigneau）やヴァニエ（Philippe Vannier）、ピュマネル（Victor Olivier de Puymanel）、フォルソン（Godefroy de Forçanz）、デ

スピュオ（Jean Marie Despiou）といったフランス人たちはその後も阮福暎の幕僚として残り、1802年に阮朝が成立した後もベトナムに残って阮朝の官吏となった<sup>2</sup>〔Wilcox 2006; Mantienne 2012; 多賀2022〕。クラウファードがフランス語の訳文を準備したのは、アジア在住のヨーロッパ人の中で、阮朝とフランス人の関係についての情報が共有されていたことを示している。

さて、クラウファードがカンザーに英語の手紙とフランス語の訳文を添えて送ったところ、カンザーのマンダリンから中国語に訳した書類を提出するよう求められた。この書類の中には船に積載している武器弾薬のリストも含まれていた。カンザーのマンダリンの業務には、外国船が携帯する武器類の情報収集も含まれていたようである。『嘉定城通志』には「有芹滌道守禦」（卷二山川志藩安鎮）とあり、カンザーに「道」の「守禦」が置かれていたとある。この「守禦」は海上防衛を担う役割を持っていたと思われることから、カンザーのマンダリンは「守禦」の長であったと考えてよいだろう。そうすると、カンザーの「守禦」はブンタウもその管轄下に置いていたことになる。ところで、クラウファードの日記では同一人物をチーフ（Chief）と記したり、マンダリン（Mandarin）と記載したりしている。マンダリンとは西洋人が中国やベトナムの官僚を呼び表す時に使用した言葉である。一方、チーフはなんらかの組織や地域の長を意味する。後述する25日の日記では、カンザーのマンダリンは2000人におよぶ住民を統治する権限を有しているとある。この2000人の住民とは26日の日記から現在のカンタイン町の住民を指していたことがわかる。このことから、カンザーのマンダリンは「守禦」の長でもあり、カンタインの行政長でもあったことが伺える。これが、マンダリンやチーフといった言葉の錯綜につながっていたのだろう。

## 2. 8月25日

カンザーのマンダリンはおよそ2000人に及ぶこの地域の住民に対して権限を持っているようであった。

2 シェノー（Jean-Baptiste Chaigneau）はベトナム名を阮文勝、ヴァニエ（Philippe Vannier）は阮文震といった〔多賀2022〕。彼らは首都のフエでクラウファードと会い、交渉の仲介を行なっている。

彼は昨夜、今日にも会いに来てくれると約束し、事実、朝の7時には多くの従者を連れて私たちの船に乗船した。昨日乗船した人たちよりも彼には風格があった。年齢は70歳ぐらいに見えたが、非常に闊達だった。彼と彼の同行者たちも昨日同様に礼儀正しく親切だった。私たちはすぐに、この新しい知人たちが大変饒舌であること、会話には過度なジェスチャーが伴うことを知った。外見は異なるものの、コーチシナ人がインドのフランス人と呼ばれる理由を理解した。老チーフ（chief）が新鮮な魚を提供してくれたので、お返しに布と食卓用金物、そして間違いなく喜ばれたブランドーを贈った。彼はサイゴンの総督に我々の手紙を速やかに送ることを約束し、1日から1日半で返信があるだろうと保証した。

25日の日誌をみると、カンザーのマンダリンはブントウのチーフよりも風格を持っていたとある。実際そうだったのかはわからないが、クラウファードがそのように書いたのは、カンザーのマンダリンがブントウのチーフよりも上位のランクにあることを示そうとしたためだろう。クラウファードはまた、このマンダリンとその従者たちが大変な饒舌家で、その会話には過度なジェスチャーが伴うことを示した後で、コーチシナ人がインドのフランス人と呼ばれる所以を理解したと述べている。このあたりの記述は、コーチシナ人のキャラクターを東南アジア在住のイギリス人がどのように捉えていたのか、また、インド在住のフランス人に対するイギリス人の印象を示していて興味深い。

ベトナム側の行政という面で興味深いのは、カンザーのマンダリンが1日から1日半でサイゴンから返信が届くだろうと回答している点である。外国船が来航した際の伝達経路がかなり整備されていたことがうかがえる。

### 3. 8月26日

昨晚、私とフィンレイソン氏、ラザフォード氏の3人で老チーフを訪問し、暖かく迎えられた。お茶とタバコでもてなされた。カンザーは貧しく、チーフの家も非常に質素なものだったが、私たちの訪問に対する歓待はそれを補って余りあるものだった。今朝早くに、再び彼は私たちを訪ねてきた。昨日、多くの漁師たちが船に乗り込み、非常に安い価格で新鮮な魚を提

供してくれた。私たちが即座に支払いを行ったことで、彼らは今朝もやってきていた。老チーフが乗船した時、船には二人の漁師がいた。彼らは無断で来たようで彼の従者はおもむろに漁師たちを罰し始めた。私たちは凶らずも一人の漁師が拘束されるという、東洋の統治（Oriental government）の実例を目の当たりにした。特に私たちの注目を引いたのは、従者がその漁師を連行する際、顔を平手打ちし、滑稽なほどの巧妙さで蹴りつけていたことだった。その足は、蹴るたびごとに腰や、時には肩にまで届いていた。漁師は甲板にひれ伏せて罪を認め、3度の礼をして慈悲を求めることで身を守ろうとした。私はこの暴力行為についてチーフに苦情を述べたが、彼はこの問題を非常に軽く扱い、漁師の過ちはむしろ礼儀の欠如や慣習の無視であると見なしているようだった。そして、私たちに不便をかけることがないこと、漁師にさらなる害が及ぶこともないことを保証し、その漁師を直ちに解放した。この老人はお茶とリキュールを楽しんだ後、私たちのもとを去った。

午前中に、ラザフォード氏と私は陸に上がり、最初の時と同じように年老いたマンダリンに温かく迎えられた。彼は私たちのインド人従者を留め置くよう求め、私たちを私宅に招き入れた。そこには威厳のある中年女性、つまりチーフの妻と、若くて美しい3人の娘たちがいた。彼女たちは見知らぬ者の出現にも全く動じる様子はなく落ち着いていた。私たちが狩を楽しむ気で見るとった老人は、彼の部下2人を同行させた。私たちは村の近くの畑を散策した後、村の中心部を通りながら戻った。カンザーの村は川から伸びるクリーク沿いに作られていた。住民は約300家族、2000～3000人ほどである。男性はどうやら漁に出ているようで、女性や子どもばかりだった。土地の標高は低いものの、シャムのような高床式ではなく、家屋は直接、地面の上に建てられていた。私たちの姿は大いに好奇心を引き起こし、住民たちは礼儀正しく敬意を持った態度で私たちの周りに集まった。村には豚や家禽がかなり飼われているようで、少なくとも外見上は物不足や生活苦を見て取ることができなかった。

散策中、私たちは村から1マイルほど離れた場所にある2つの寺院を訪れた。それらの寺院はレンガとモルタルで建てられ、赤い瓦の屋根で、棟や庇には

色彩を施された動物の彫刻があった。それぞれの寺院には二つの部屋があった。最初の部屋にはレンガとモルタルで作られた祭壇があり、その上には向かい合う二羽のコウノトリの像が置かれていた。奥の部屋には墓のように見える複数の高く盛り上がったレンガとモルタルの塊があった。壁には虎や魚、竜や怪物の絵が描かれていた。特定の信仰の対象となるような彫像や絵画はなかった。だが、この寺院はこの辺りの守護神であり、カンザーとその周辺の漁師たちの保護者として崇められている、ある大なる魚（certain great fishes）を祀っているとのことだった。先ほど述べたレンガとモルタルで作られた墓のようなものには、セント・ジェームズ湾の海岸に打ち上げられたこれらの魚の遺骸が納められているとのことだった。

これらの寺院に接して貧相な家が併設されているが、ここは裁判が行われる場所とのことだった。すぐ近くには広大な墓地があり、墓は通常、粗い土の塚で構成されており、外側は時折、粗い石で覆われていた。

26日の日誌では、住民とマンダリンの関係やカンタイン町の情景が生々しく描写されている。『嘉定城通志』にはこうした記述がないため、26日の日誌は極めて貴重な情報を提供してくれている。日誌によるとクラウファードがカンタインの町に上陸したのは25日と夜と、26日の午前の2回である。25日の訪問は夜間だったこともあり、町の描写はまったくない。

26日の早朝、カンザーのマンダリンがクラウファードの船にやってきた。日誌にはマンダリンの来訪目的が明記されていないが、クラウファードをカンタインに迎えるためだったのだろう。マンダリンがクラウファードの船に乗船したとき、彼の船には二人のベトナム人漁師がすでに乗船していた。前日にクラウファードたちはカンザーの漁師たちから魚を購入したこともあって、この日も漁師が魚を売りに来ていた。それを見るや、マンダリンの従者がクラウファードたちの前で漁師を拘束して暴行に及んだ。彼はこの一連の出来事を「東洋の統治」の実例を垣間見たと述べている。また、その暴行が「顔を平手打ちし、滑稽なほどの巧妙さで蹴りつけ」、「その足は、蹴るたびごとに腰や、時には肩にまで届いていた」ことに驚いてい

る。確かに、この暴行の様子をいきなり見せつけられればイギリス人たちは驚くだろう。クラウファードがマンダリンに苦情を述べたのも頷ける。これに対してマンダリンは、何事もなかったかのようにやり過ごしている。クラウファードはこれをマンダリンが漁師の行動が「礼儀の欠如や慣習の無視であると見なしている」からだと考えた。だがおそらく、マンダリンの許可得ず無断でクラウファードの船に乗船したことで漁師は罰せられたのだろう。カンザーのマンダリンが「守禦」の長であり、行政の長であることを踏まえれば、一般の住民が外国船に乗船する際には彼の許可を得る必要があったのだと思われる。

次にカンタイン町の情景についてみてみよう。クラウファードがまず注目したのは家屋についてであった。彼は海水面からそれほど高くない土地であるにも関わらずシャムのような高床式家屋ではなく、地面に直接家屋が建てられていたと記述している。カンタイン町からロンホア村にかけての沿岸はソアイザップ川とロンタウ川、ティバイ川によって河口まで運ばれた碎屑物が、波浪によって陸側に押し戻され堆積することで形成された大きな浜堤である（図1）。カンザーの地形はこの浜堤の海側に干潟、後背部にマングローブ湿地が広がる。カンタイン町はこの浜堤に作られた町であるが、大潮高潮線よりも標高が高く潮汐によって浸水することはない。そのため、現在でも家屋は地面の上に直接建てられている。

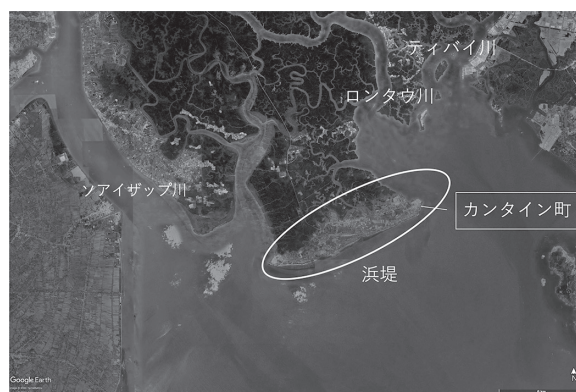


図1 カンザーの浜堤平野：Google Earth Proにて筆者作成

クラウファードによると、カンタインの町はクリークに沿って形成されていた。図2は現在のカンタイン町の衛星画像であるが、町の中心にクリークがあることがわかる。このクリークを中心におよそ300世

帯、2000人から3000人が居住していた。クラウファードによると、男性は漁に出かけており、村には女性と子供しかいなかった。また、村では豚や家禽が飼われ、物不足や生活苦を感じさせるものはなかったとしている。『嘉定城通志』は「人と店が多く集まり、住民は漁業に従事している（店市稠密、民從魚藝）」（巻二 山川志藩安鎮）とあり、クラウファードの記述とほぼ同じ内容になっている。ただし、『嘉定城通志』には人口の情報が入っておらず、300世帯、人口2000人から3000人というクラウファードの情報は貴重だと言えるだろう。



図2 現在のカンザー県カンタイン町。蛇行したクリークの両側に町が形成されている：Google Earth Pro

さて、クラウファードは散策の道中でレンガとモルタルで建てられた赤い瓦の屋根をもつ寺院に立ち寄っている。その寺院の棟や庇は動物が彫られ彩色されていた。中には祭壇があり、その上には向かい合う二羽のコウノトリの像が置かれていた。奥の間の壁には虎や魚、竜や怪物が描かれ、レンガとモルタルで盛り上げられた墓のようなものがあった。それは地域の守護神であり、漁師の守り神である偉大な魚（certain great fishes）を埋葬したものだ。この記述から、クラウファードが訪問した寺院が『嘉定城通志』（巻六城池志藩安鎮）にある「芹滌海神廟」であったことがわかる。『嘉定城通志』には「瓦屋根で棟には彫刻と彩色が施されており巖かである（雕畫棟文彩巖）」とあり、その形状もクラウファードの記述と合致する。また、『嘉定城通志』では海神廟は阮朝の官製輸送船を守る「南海將軍」が祀られ、毎年1月に国家祭礼が行われる場であった。そして、「南海將軍」は「象魚（クジラ）」であるとされていた。

クラウファードの日記にあって、『嘉定城通志』にないものは、屋内の情報である。クラウファードは寺院には二つの部屋があり、奥の間にはレンガとモルタルで盛り上げられた偉大な魚の墓があったと述べている。『嘉定城通志』（巻五物産志、巻六城池志辺和鎮）には、クジラが浜で死んでいた場合に遺体を埋葬し、その側に祠を建てるという記述はあるものの、建物の内部に埋葬するといった記述はない。クラウファードの記述によって、カンザーの海神廟が他の南海將軍祠とは異なる特別な場所であったことがわかる。また、この寺院の横には貧相な家屋が建てられており、そこは裁判所として使用されていたとある。廟の中にクジラが埋葬されていたことや、寺院の横に裁判を行う家屋が併設されていたという情報は『嘉定城通志』にはなく、これも貴重な情報だと言える。

#### 4. 8月28日

この日の朝早く、カンザーのマンダリンが私たちの船にやってきて、昨夜遅くに私たちの手紙への返信が届き、サイゴンの総督が寄越した代表団が私たちを護衛するために到着したと知らせてくれた。代表団のメンバーは乗船許可を求めて待っているとのことで、私たちが許可を与えるやすぐに乗船してきた。代表団は7人のマンダリンで構成されており、4隻の船に乗ってきていた。そのうちの大きな2隻は私たちのために用意されたもので、それぞれ40人の漕ぎ手が乗っていた。漕ぎ手は真っ赤な服を着て、羽飾りのついたヘルメットのようなものをかぶっていた。彼らは船首に向かって立ったまま船を漕いでいた。

代表団のメンバーは上質の絹の衣類を纏っており、とても威厳に満ちた風格であった。彼らの態度は爽快で活気があり、たくさん話し、笑い、全く気兼ねなど見られなかった。私たちの会話は主にサイゴンへの訪問に関するものだった。私たちは抑留されることがないようできる限りの準備をしたが、サイゴンに3日以上滞在することはないと彼らから保証された。当初、私たちの船で行くつもりだったが、この方法では時間がかかることがわかり、サイゴンから派遣された平底船（barge）で行くことになった。議論をしている間、代表団のすべてのメンバーは完璧な礼節と、程よいユーモアを示した。彼らからの質問は少なく、その質問もシャム人と接した時のように無作法さも、し

つこさもなかった。最も重要な質問は、この使節団はイギリス国王が派遣したものなのか、インド総督が派遣したのかを確認するものだった。これに対して、一般的にイギリス国王が東方の君主に使節を送ることはなく、必要な場合はその権限をインド総督に委任するのが慣例であると回答した。代表団はお茶とリキュールを楽しんだ後、敬意を持って辞去した。

28日の日誌の中で注目すべき点は3点ある。1つはサイゴンから7人の官吏で構成された代表団が送られてきたことである。2つ目が、クラウファードたちが自船ではなく、派遣された平底船に乗り換えてサイゴンに向かったことである。そして、最後は代表団がクラウファードにした質問となる。以下では順次、この点について注釈を行いたい。

まず1点目は、海外からの使節団が来航した際には、こうした代表団がカンザーにまで出迎えに来ていたことである。クラウファードによると、代表団の7人の官吏は上質の絹の衣類を纏っていたとある。彼らは正装でカンザーまで出向いていた。外交特使が海外から来訪した際の阮朝の対応と、カンザーの重要性を示す点で興味深い。

第2点目は、代表団が乗ってきた船についてである。彼らは4艘の船を伴っていた。このうちの2艘がクラウファードたちのために用意され、船の漕ぎ手は1艘につき40人だった。彼らは真っ赤な衣類に身を包み、羽飾りのついたヘルメットのようなものをかぶっていたとクラウファードは述べている。彼の本の中には、この平底船についてのイラストがあるので、参考までに見ておきたい。イラストの漕ぎ手は14人なので、実際にクラウファードたちが乗船したものよりも小型の平底船となる。クラウファードは漕ぎ手が船首に向かって立ったまま漕いでいると述べているが、このイラストでもそうなっている。また、彼がヘルメットと形容したものはベトナムでノン（Nón）と呼ばれる笠だったことがわかる。

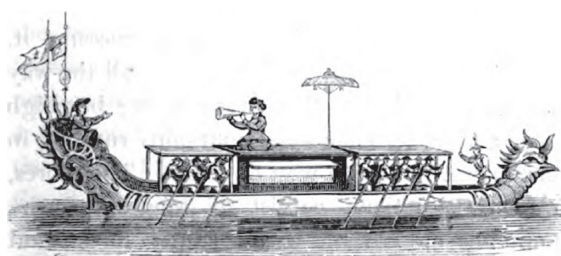


図3 コーチシナの平底官船 Crawfurd 1939, p. 349

最後は、サイゴンからの代表団がクラウファードにした質問である。代表団はクラウファードたちがイギリス国王から派遣されたものなのか、インド総督が派遣したものなのかを問うている。ここで重要な点は代表団が、インド総督がアジア諸王国との外交や通商交渉を独自に行えることを知っていたことである<sup>3</sup>。だからこそ、使節団を派遣したのがイギリス国王なのかインド総督なのを問うていた。先述した通り、阮朝初代皇帝の嘉隆帝は西山党との戦乱において何度も逃亡生活を強いられ、その都度、アジアに滞在していたフランス人やイギリス人、ポルトガル人の協力を得ていた。また、彼の幕僚や兵士はフランス人、華人、クメール人、マレー人、ラオス人、シャム人など多様な人々で構成されていた [Wilcox 2006; 多賀 2022]。嘉隆帝はクラウファードが訪越する2年前に亡くなっていたが、建国の元勳たちは健在であり、嘉定城総鎮の黎文悦もその一人だった<sup>4</sup>。とりわけ黎文悦はコーチシナにおけるキリスト教徒の保護者として知られている。こうしたコーチシナの国際的感覚が代表団の質問には如実に現れている。

3 東インド会社は国王からアジア貿易の独占を認められた商事会社である。その一方で東インド会社はインドでの徴税権、兵士を雇用する権利、アジア諸王国と条約を締結する権利などを認められていた [羽田 2015]。インド総督は1784年まで、東インド会社の理事会に任命権があった。しかし1784年にイギリス本国でインド法が制定され、本国政府内に東インド会社を監督するインド庁が設立されると徐々に総督の任命もインド庁が行うようになっていった。クラウファードの使節団を組織したベンガル総督のフランシス・ロードン＝ヘイスティングズは東インド会社が任命した総督ではなかった。それでも東インド会社から自由であったわけではない。ヘイスティングズは1817年から1819年にかけて第三次マラーター戦争を指導するが、当初は東インド会社の役員会はこれに反対していた。また、インドで実際に戦闘を行ったのは東インド会社の兵士だった [浜渦 1999]。

## 5. おわりに

本論はジョン・クラウファードの“*Journal of an Embassy from the Governor-general of India to the Courts of Siam and Cochin China*”を用いて1822年のカンザーについて考察した。クラウファードの著書は日誌であるが、それゆえ彼が見聞きしたりリアルなカンザーを垣間見ることができた。現在のカンザー県カンタイン町は、かつてベトナムと海外を結ぶ海の玄関口だったことなど想像もできないのどかな地方の町ではない。だが、クラウファードのわずか4日間の日誌であっても、それを『嘉定城通志』と照らし合わせ、また、彼の経験をコーチシナや東南アジアの歴史的文脈の中に置き直すことで、カンザーという場が持っていた国際性の一端を知ることができた。

なお、本論は本誌『民俗文化』36号の「嘉定城通志を通してみた阮朝初期のマングローブ湿地と風俗」と対をなすものである。二つの論考を合わせて読むことで、より深く、当時の海の玄関口だったカンザーの状況を理解してもらえらるだろう。

## 参考文献

鄭懷徳『嘉定城通志』慶應義塾大学言語文化研究所(2013)

Frédéric Mantienne (2012) *Pierre Pigneax : Évêque d'Adran et mandarin de Cochinchine 1741-1799*. les

Indes Savantes

Wilcox, Wynn. 2006. Transnationalism and Multiethnicity in the Early Nguyễn Ánh Gia Long Period. In *Việt Nam: Borderless Histories*. University of Wisconsin Press. Tran, Nhung Tuyet and Reid Anthony eds., University of Wisconsin Press: 194-216

鈴木伸二(2007)「ベトナム南部・マングローブ湿地域の近海漁業」『民俗文化』19号、近畿大学民俗学研究所：p.305-342

多賀良寛(2022)『アジア人物史(17～19世紀)：アジアのかたちの完成』(姜尚中総監修)集英社：337-373

羽田正(2015)「総論：東インド会社という海賊とアジアの人々」『東インド会社という海賊とアジアの人々』(東洋文庫編)勉誠出版：1-35

浜渦哲雄(1999)『大英帝国インド総督列伝 イギリスはいかにインドを統治したか』中央公論新社

4 クラウファードがコーチシナを訪れたときは二代皇帝の明命帝の治世になっていた。明命帝は嘉隆帝の第4子であったが、兄たちが夭逝していたこともあり帝位についた。しかし長子であった阮福景の子供を推す勢力もあり、その中心にいたのが黎文悦だった。コーチシナを離れたクラウファードは首都のフエに向かったが、そこでフエ王宮内の黎文悦に対する微妙な空気感を読み取っている。10月12日の彼の日誌には外務大臣からインド総督の親書を黎文悦に見せたのかと問われ、それがこちらの慣習だと考えたところ、閣下宛の親書を臣下が先に閲覧することは認められておらず、黎文悦にはコピーで十分だった詰問されたところ。そして、クラウファードは「これらの指摘はおそらく宮廷がサイゴン総督に対して抱いていた嫉妬心から生じたものと思われる。私がこの件について話をしたすべての人の一致した意見によれば、この総督は王国内での地位と権力において最重要人物であるだけでなく、意思の固さ、才能、そして誠実さにおいても最も際立った人物と見なされている。彼が宮廷を離れたことは、人々にとって不幸な出来事として惜しまれている。彼の厳格な監視と厳しさによって課されていた抑制を失ったことで、下級官僚たちの腐敗が限りなく広がっていると私は聞かされた。陛下は、彼の影響力と人気を自然に嫉妬しているようだ」と述べている。



## Appendix

*August 24* - Early yesterday morning, Cape St. James was visible at the distance of about twenty-five miles, having then the appearance of three small islands. It falling calm, however, and the tide being against us, we anchored until the afternoon, when we again made sail, and early this morning reached the Cape, and anchored off bay of Cocoa-nuts. Cape St. James's, a promontory of from three to four hundred feet high, forms the eastern entrance of the river of Saigun and occurring, after passing a low coast of two hundred miles extent, where not a hill or elevated spot is seen, forms an excellent landmark for the entrance of the river, which cannot well be mistaken. Being within little more than a mile of shore we landed, while the ship was waiting for the flood-tide. The prevailing rock which forms the hilly range of Cape St. James, is a tough, hard granite, intermixed occasionally with sienite. The mountains are wholly uncultivated, being covered with a scanty forest, of which the bamboo forms a considerable part. We heard the crowing of the wild cocks in the woods, and saw some fishing-eagles and ring-doves, but no quadrupeds.

In the afternoon, when the flood-tide made, we sailed for the anchorage of Kandyu, which we reached before dusk. As we passed the village of Pungtao, which lies in the angle of the bay, where the ridge of hills forming Cape St. James's ends, the Mandarin, or petty officer of the place, came on board with a large party of followers. He was a little, lively old man, whose age was little short of sixty. We were forcibly struck with the contrast which he and his followers formed with the first Siamese with whom we became acquainted at the entrance of the Menam. The Cochinese were more decently clad, and instead of being sluggish and sullen in their manners, were lively and civil. This officer recommended to us to write a letter to the Governor of Saigun, to be forwarded through the Chief of Kandyu, who was his superior officer. We accordingly wrote an English letter to His Excellency, with a French translation, understanding at the time that several French gentlemen were at Saigun, and

that it was possible there might be no person there who could understand the original. This letter we transmitted to the Mandarin of Kandyu. He sent a polite message, in answer, to say that a list of the persons attached to the Mission, of the ship's company, and of the guns, arms, and ammunition, in the Chinese character, would be necessary to send to the Governor Saigun, with our letter. This requisition was complied with.

The point of Kandyu may be looked upon as actual mouth of the river on its right or western bank. From Cape St. James to this place, a distance of nine nautical miles, may be viewed rather as a bay of the sea than a portion of the river. On the western side, opposite the high lands of Cape St. James, an extensive mud-bank, proceeding from a flat shore, narrows the channel for ships entering to about two and a half nautical miles. From the edge of this bank to the shore on the eastern side, this spacious bay is not less than four and a half miles broad. In mid-channel there is every where from six to nine fathoms; and after you have fairly entered the river, rarely less than ten; so that this fine stream is navigable for ships of almost any burthen, and it scarcely requires a pilot throughout. Relying upon our bearings and soundings, and on our charts, we stood boldly on at night, as if we had been entering a harbour well known to us. The actual breadth of the true mouth of the river is about one and a half English mile.

We were now anchored immediately behind the Point of Kandyu, secure from every wind. To the eastward, the hills of Cape St. James, and more to the north an elevated range of mountains, seemingly about twenty-five miles distant, were visible. Every where else nothing was to be seen but the low and wooded shore, with fishing villages here and there thinly scattered over it. The extraordinary clearness of the water, for so large river, coming through an extensive alluvial tract, forms a striking contrast with the disturbed and muddy streams of the Ganges and Menam.

*August 25* - The Mandarin of Kandyu, whose authority seems to extend over all the inhabitants about this part, amounting, as we were told, to about two thousand in number, had promised last night to pay us a visit on the course of today, and accordingly he came on board as early as seven o'clock in the morning, with a great number of followers. He was superior in appearance to any of those who came on board yesterday. He seemed near seventy years of age, but full of vivacity. Neither he nor those who accompanied him were, in any respect, less civil or obliging than our visitor of yesterday. We soon found our new acquaintances to be great and vehement talkers, and their conversation was accompanied by a more than moderate portion of gesticulation. It readily occurred to us, that there was in exterior, although it unquestionably amounted to nothing more, some foundation for the Cochin Chinese being called the French of India. The old chief brought us a supply of fresh fish, and we presented him, in return, with some cloth, cutlery, and, what seemed to be no less welcome, some brandy. He promised to forward, with all speed, our letter to the Governor of Saigun, and said, that in a day, or a day and a half, we should have a reply; and that he rested assured the Governor would be gratified with the visit which we proposed paying him.

*August 26* - Mr. Finlayson, Mr. Rutherford, and myself, visited the old chief last night, and were received with great cordiality. Tea and tobacco were served to us. Kandyu is but a poor place, and the chief's residence a very paltry one; but the hospitality of our reception made some amends for the homeliness of our entertainment. At an early hour this morning he visited us again. A number of fisherman had come on board in the course of yesterday, and furnished us with an ample supply of fine fish at very low prices. Encouraged by our prompt payment, they had repaired to us again this morning, and the old chief found two of them on board. It appears they had come without orders, and the

followers of the man in office began, in a manner quite unexpected to us, to punish them summarily on the spot for this alleged breach of duty. Our attention was called to this practical illustration of Oriental government, by seeing one of the fisherman taken into custody; the officer, as he carried him off, cuffing him over face, and kicking him with such ludicrous address, that his foot, at every effort, reached sometimes the loins and sometimes the shoulders of the alleged offender. The fisherman's defence consisted in throwing himself on his face, on the deck, making three prostrations, acknowledging his offence, and crying for mercy. I complained to the chief of this piece of violence; but he treated the matter very lightly, and seemed to regard the fisherman's offence rather as a breach of etiquette, or neglect of customary forms, than as any thing more serious; and assured us that it should be attended with no inconvenience to us, or farther injury to the fisherman, who was immediately released. The old man, after partaking of tea and liqueurs, left us.

In the forenoon, Mr. Rutherford and myself went on shore, and were received by the old Mandarin with the some cordiality as upon the first occasion. Requesting us to leave our Indian attendants behind, he conducted my companion and myself into his private apartments. Here we found a respectable-looking middle-aged woman, the chief's wife, and three young and comely girls, his daughters. The ladies did not appear by any means abashed or discomposed by the appearance of strangers. Seeing that we were disposed to take the diversion of shooting, the old man sent two of his principal people to accompany us and we wandered over the fields near the village, passing through the principal part of the latter on our return. The village of Kandyu is built upon a creek, connected with the river. The inhabitants consist of about three hundred families, or between one and two thousand inhabitants.

The men were, I believe, chiefly out fishing; but the women and children were very numerous. Although the land lies here so low, the houses are all upon a

level with the ground, and not raised on posts as amongst the Siamese. Our appearance excited a good deal of curiosity, and the inhabitants flocked round us in numbers, observing a very civil and respectful demeanour. The village appeared well stocked with hogs and poultry, and there were at least no outward marks of want or misery.

During our excursion, we visited two temples about a mile distant from village. They were built of brick and lime, and roofed with red tile, having the ridges and eaves ornamented with figures of animals carved in wood and painted. Each consisted of two chambers, in the first of which was an altar of brick and lime, having upon it two figures of storks opposite to each other. The inner chamber contained a number of elevated masses of brick and mortar, resembling tombs. The walls were painted with figures of tigers and fish, and with dragons and other monstrous animals. There seemed no distinct object of worship, either statue or picture. We were told, however, that the temples were dedicated to certain great fishes, which were represented as the tutelary deities of place, and the protectors of the fishermen of Kandyu and its neighbourhood. The mounds of brick and mortar, resembling tombs, of which I have spoken, were alleged to contain the remains of some of the fishes in question, which had been stranded on the shore of the bay of St. James.

Connected with each of the temples, was a poor mean-looking house, where justice, we were told, was administered. Near at hand was an extensive burying-ground, the tombs commonly consisting of rude mounds of earth, the outer sides now and then cased with rough stones.

*August 28* - This morning early, the Mandarin of Kandyu came on board to inform us, that a reply to our letter had arrived late last night, and that a deputation had reached the place from the Governor of Saigun, to invite and escort us up to his residence. We were informed that the persons who composed the deputation, waited only for our sanction to come

on board. Upon receiving this, they accordingly came off without delay. The deputation consisted of seven Mandarins in four boats, the two largest of which, meant for our accommodation, were manned each with forty oars. The rowers were dressed in scarlet, and had on a kind of helmet, with a plume of cock's feathers. They rowed the boats standing upright, and facing the prow.

The members of the deputation were well dressed in silks, and had in all respects an air of much respectability. Their manners were brisk and lively; they spoke and laughed a great deal, and seemed under no constraint. Our conversation only touched upon our visit to Saigun. We endeavoured to provide as well as we could against detention, and were assured by them that we should not be delayed there beyond three days. We had at first intended to have gone up in the ship, but finding that our passage up and down in this manner would be tedious, we abandoned the projects, and resolved to proceed in the barges now sent down to receive us. In the discussion which took place, perfect urbanity and good humour were observed on the part of all the members of the deputation. Few questions were put by them, and these few were not ill-bred or importunate, as in our first intercourse with the Siamese. The most material one had for its object to ascertain whether the Mission came from the King of England, or from the Governor-general of India. To this we generally answered that His Majesty the King of England sent no embassies to any of the prince of the East, and that when they were necessary, he usually deputed his authority to the Governor-general of India. After partaking of tea and liqueurs, the deputation took their leave, and were saluted.